

トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅲ

—児童期（9～10歳児）における調査と分析—

犬童昭久¹・王寺直子²・栗山裕至³
櫻井晋伍⁴・白石恵里⁵・丁子かおる⁶
樋口和美⁷・前村晃⁸・宮崎祐治⁹

Reconsideration and trial of Torrance's creativity test III : Survey and analysis in early childhood (9-10years-old children)

INDO Akihisa・OHJI Naoko・KURIYAMA Hiroshi
SAKURAI Shingo・SHIRAIISHI Eri・CHOJI Kaoru
HIGUCHI Kazumi・MAEMURA Akira・MIYAZAKI Yuji

抄録

本論文はE.P.トーランスによる創造性テストを基にした子どもの創造性育成についての研究であり、子どもの造形表現における創造性の特性を描画と日常の行動特徴から探り、明らかにしていくことを目的としている。これまでは幼児を調査対象としていたが本研究では、次段階として児童（9歳～10歳児）の描画を対象とした描画発達及び創造性について調査を行った結果と、児童の性格や活動の傾向から総合的な分析を通して創造性を育む要因について考察を行った。調査と分析の結果として、描画発達よりも創造性の数値が高く表れた児童が多く、この結果は幼児（5歳～6歳児）を対象とした調査と同様の結果であり、児童においても潜在的な創造性が強く表れた結果となった。このことから創造性は幼児・児童期特有でみられる可能性があることを確認できた。

I. 本研究の目的

本研究は、2019年から継続している、E.P.トーランス（1915-2003）による創造性テスト¹⁰を基にした子どもの創造性育成についての研究であり、子どもの造形表現における創造性の特性を描画と日常の行動特徴から探り、明らかにしていくことを目的に遂行している。これまでは幼児（5歳～6歳児）を対象として調査分析を行ったが、本研究では次の段階として小学校4年生の児童（9歳～10歳児）の描画を対象とした児童の描画発達及び創造性について調査を行い、その結果と児童の性格や活動の傾向から総合的な分析を通して、豊かに創造性を育む要因について考察した。

II. 研究の方法

トーランスの創造性テストに準拠し作成した課題と描画発達課題の4種類（描画発達調査課題2種、創造性発揮調査課題2種）¹¹について調査した結果を散布図で表し、各児童の描画発達と創造性の発揮、日常の行動傾向等の関わりについて精査し比較検証を行った。

前回の調査において、幼児が表した描画の表現方法や表し方には多くの差異が見られたことから、これらも参考にしながら、散布図上で顕著な傾向を示した児童を四つの領域ごとに抽出し、個々の創造性発揮について着目して考察した。また、創造性が日常の行動特性に関連すると仮定していることから、児童の行動観察調査を実施することで、それぞれの児童の行動特性をまとめ、これらと描画発達と創造

性の発揮についても比較しながら考察を行った。なお本研究は、前回の研究である「トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅱー幼児期（5～6歳児）における調査と分析ー」（白石ら、2021）に準拠した方法で取り組み、それを踏まえた内容で構成している。

a. 本研究の対象と位置づけ

第一段階（2019年度の予備調査¹²⁾：K園2クラスの年長幼児（5歳～6歳児）29名

第二段階（2020年度の調査¹³⁾：A園2クラスの年長幼児（5歳～6歳児）36名

第三段階（2021年度の調査 ※本研究）：K小4年生2クラスの児童（9歳～10歳児）61名

b. 調査対象と調査期間

描画調査は、K小学校における4年生の児童に対して2020年12月10日・22日に実施した。課題（図1ーA～D）の用紙を配布し、黒のボールペンで描画した。今回も各課題の描画は児童の意思で終了できるように20分間という時間を設定した。児童同士の影響を減らすために教室の机は1m以上離して取り組まれた。描画調査後にはクラス担任による児童の日常の行動を観察した調査票を用いた調査を行った。なお、全ての課題を体験した61名の児童を分析対象とすることとした。

c. 描画調査課題と評価

描画発達を調査する課題は、BBCの放送大学や日仏共同研究の描画発達調査の課題¹⁴⁾を参照し、創造

性発揮を調査する課題はトーランスの創造性テストに準拠して、筆者らで作成した。使用した調査課題は図1に示す通り、前回と同様に次の4種類を使用した。各課題の設問は次の通りである。

描画発達調査課題A

設問：「どうようび ゆうがた やきとりやさんに きました。しゃしんのような そーせーじを たけぐし(たけのほそいぼう)で さしとおしたのがありました。したのしかくのなかに このえをかいてください。」

描画発達調査課題B

設問：「おうちのなかに しかくい てーぶるが あります。いちばんなかよしのおともだちと おやつの じゅんぴの おてつだいを しています。てーぶるのうえに さんどいっちと じゅーすの はいった こつぶを おいています。おともだちと おやつの じゅんぴの おてつだいをしているようすを えにかいてください。」

創造性発揮調査課題C

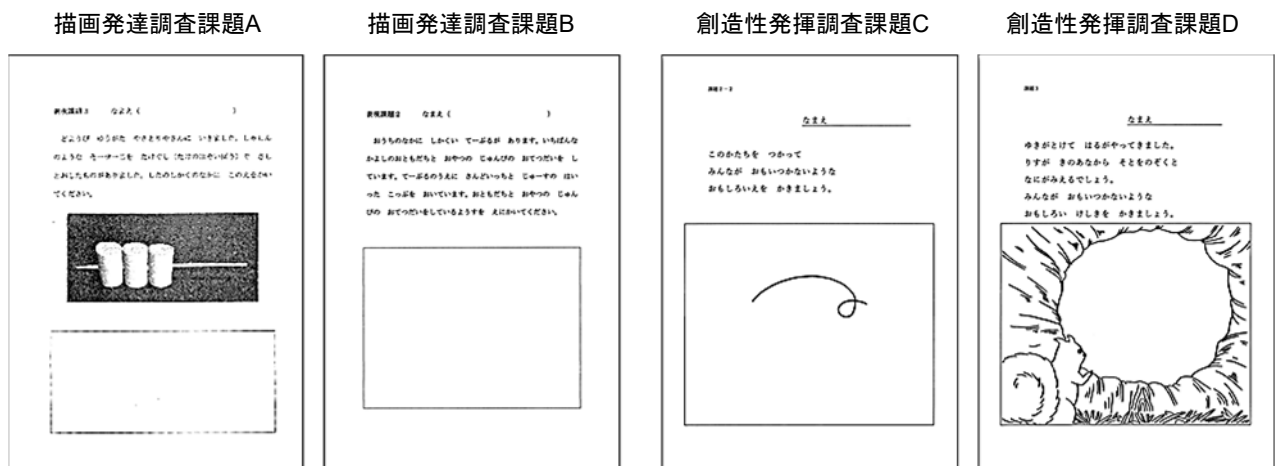
設問：「このかたちを つかって みんなが おもいつかないような おもしろいえを かきましよう。」

創造性発揮調査課題D

設問：「ゆきがとけて はるがやってきました。りすが きのあなから そとをのぞくと なにがみ

図1 描画調査課題

※白石ら（2022）図1の内容に準拠



えるでしょう。みんなが おもいつかないよう
な おもしろい けしきを かきましよう。」

各課題の内容は次の通りである。描画発達調査課題A（以下、A〈ソーセージの串刺し写真〉）は、串に刺したソーセージの写真を見て下の枠に模写をするものである。描画発達調査課題B（以下、B〈おやつ準備のお手伝い〉）は、友達とおやつ準備をしている様子を描く課題である。創造性発揮調査課題C（以下、C〈未完成の記号模様（曲線）〉）は、曲線記号を使って誰も思いつかないような面白い絵を求めている。創造性発揮調査課題D（以下、D〈木の穴から外をのぞくリス〉）は、春が来てリスが、木の穴から外をのぞいた時に見える、誰も思いつかないような面白い絵を求めている。

各描画調査課題の評価の観点は、表1に示す通り

i～ivの項目に設定し、描画発達および創造性発揮の観点を基に各項目1～5点で評価した。

描画発達調査課題は、子どもの絵の発達段階を基に、発達度によって評価を行った。創造性発揮調査課題は、トランスの創造性テスト評価の4つの観点（①流動性：刺激となる形から、子どもが、どれだけよみなく早くアイデアを出すか、②柔軟性：描かれた絵が、どれだけ豊かな種類にわたっているか、③独創性：誰でも思いつきそうにないものを考えて描けたか、④入念性：ねばり強く、丹念に描けたか）¹⁵に準拠し、評価した。

なお、全ての描画課題結果は、筆者ら全員で目を通した後、1名がプレ評価を行い、別の4名で再度評価をした。評価と再評価は概ね同数値であったことから、評価結果の数値は妥当であると判断し、再評価の平均データを分析のデータとした。

表1 各課題の評価の観点

※白石ら（2022）表1の体裁を一部修正

描画発達調査課題A・Bは子どもの絵の発達段階に準拠	
描画発達調査課題A〈ソーセージの串刺し写真〉	
i	貫通部分が見えない様子を描けているか（レントゲン描法であるかどうか）
ii	ソーセージの円筒形を描けているか（上面のみ楕円、上面と側面のつながり、側面の形、ソーセージの数、底面の形）
iii	串の形状（太さ、尖っている）
iv	全体の正確さや丁寧さ、伸びやかさ
描画発達調査課題B〈おやつ準備のお手伝い〉	
i	テーブルの形状の描き方（奥行や重なりを描く・展開図で描く、テーブル足が四角や角柱・棒状）
ii	テーブル上のサンドイッチやジュースの描写（配置や特徴を詳しく描く・簡単な形で描く・不明瞭、向きを視点に合わせる・展開図で描く）
iii	人物の描き方（形状を正確に描く・頭足人や棒人間）
iv	豊かさや広がり（人物の表情、周囲の飾りなど）
創造性発揮調査課題C・Dはトランスの創造性テストの評価の観点到準拠	
創造性発揮調査課題C〈未完成の記号模様（曲線）〉	
i	発想から描画までできたかどうか
ii	曲線と図柄全体の自然な接続
iii	発想の独創性（見立ての独自性や機知）
iv	豊かさや広がり（描画の積極性、表情）
創造性発揮調査課題D〈木の穴から外をのぞくリス〉	
i	発想から描画まで展開できたか（楽しんでスムーズに描く・困難や混乱）
ii	手前（リス）と奥の世界を関係づけているか（関係を基にしたイメージ・無関係な発想、描かれる種類の数）
iii	視点や展開の独自性（視点の転換、発想の機知）
iv	豊かさや広がり（表情、明るさ、感情の伝わり）

d. 行動観察調査票調査

創造性は子どもの日常の行動特性として現れると仮定し、描画調査後に分析対象児の日常の行動について、クラス担任の調査票記述による調査を実施した。調査票の質問は、「全くそうである」「ややそうである」「どちらでもない」「ややそうでない」「全くそうでない」の5件法で回答を求めた。さらに抽出児に関しては児童個別の性格や性質、特徴など、クラス担任にコメントを求めた。

e. 分析

描画調査の結果から、描画発達と創造性発揮の概括的な相関を見るために散布図を作成し、相関係数を求めた。また、描画発達と創造性発揮のどちらかに著しい偏りが見られる児童や、突出した評価（散布図上の点群から逸脱している）の児童を抽出し、抽出児ごとの描画結果から、描画発達の状態と、どのような創造性が発揮されたのかを見た。抽出児については、クラス担任による幼児の行動観察調査の内、描画の発達度や創造性に関与していると考えられる7項目「好奇心がある」「友達が多い」「外遊びが多い」「よく絵を描く」「絵本を読むのが好きである」「決まりを守る」「砂場遊びや積み木、ものづくり（工作）を好んでする」でレーダーチャートを作成し、各抽出児が発揮した創造性と日常の行動等の関わり合いや特性を見た。さらに、全体の傾向を概観するために、描画発達と創造性発揮それぞれの平均で4つの領域に分割して比較を行い、各領域に属する児童の行動特性の傾向を考察した。

Ⅲ. 調査結果および考察

1. 調査結果概要

描画調査の結果、全体的に年齢相応の描画の発達状態が見られた。調査対象の9・10歳の児童の年代は見たものをそのまま描く「写実」が取り組めるようになる時期であり、なお、空間概念の発達途上にあり、多様である。そのため描かれたものには様々な意味を包含している時期でもあるといえる¹⁶。

そのことから描画の発達状態について、今回の児童と前回の幼児の結果には相違が見られた。例として、A〈ソーセージの串刺し写真〉では、前回の幼児を対象とした調査では半数以上がレントゲン描法で

あったが、今回の児童では1名であった。またB〈おやつ準備のお手伝い〉では、テーブル上面、脚、人物の表現等が数多く見られ、一人ひとりの違いが見て取れた。なお、テーブルと脚が多視点から描かれた展開図的描法は幼児の調査結果より少なかった。

a. 描画発達調査課題

児童期の中でも「図式後期」の7歳頃からは見たものをそのまま描くことができるようになり、そこから最終的に視覚的写実性へ到達するとされている¹⁷。例えば、A〈ソーセージの串刺し写真〉では、写真では見えていない円柱形の底面の描画によって、知的写実性か、または視覚的写実性かについての区別ができた。その他にも、レントゲン描法、カタログ式表現、展開図的表現、積み上げ遠近構図、頭足人の有無で発達状態を確認できた。なお、評価の留意点として描画発達調査課題では、あくまで描画発達の状態を見るのが目的であるため、創造的であるかどうかの観点からは見ないようにした。

a- (1) A〈ソーセージの串刺し写真〉

この調査課題は、串に刺したソーセージの写真を見て描く課題である。調査の結果、61名中にレントゲン描法は1名、ソーセージの円柱形断面の描画は9名、その内で写真では見えていない底面の描写をした児童はいなかったが、円柱形底部を直線で表現した児童が1名いた。その他、32名はソーセージを円柱形ではなく楕円や円、四角形等の簡単な記号模様で表現していた。串の表現では、串に厚み（幅）がある描写は1名、その内、串の先端の尖りを表現していたのは61名全員であり、一本の単線のみで描画した児童や、ソーセージの数を3つ以上描画した児童はいなかった。串がソーセージに貫通していない状態が17名、串に刺さったソーセージを何パターンも描いている児童は1名であり、串を黒く塗りつぶしたものや、スクリブル状で描いた児童はいなかった。

a- (2) B〈おやつ準備のお手伝い〉

この調査課題は「おやつ準備のお手伝い」という状況を設定し、食卓のテーブル、ジュースの入ったコップ、サンドイッチ、自分と友達をどのように描くかを見た。61名中に展開図的表現で描画したテーブルは4名、テーブル脚の奥行きや重なりを描い

たものは16名、頭足人に近い簡素な人物画を描いた児童は5名いたが、頭部のみ的人物描写をした児童はいなかった。家や空間の装飾を描画していたのは30名であった。なお、指定されたモチーフすべてを描画できた児童は52名おり、衣服の装飾やモチーフ細部の細密描写も見られた。その他、モチーフを並べたようなカタログ式の表現も13名見られた。

b. 創造性発揮調査課題

創造性を調査する課題は2種類とも「みんなが おもいつかないような おもしろいえを かきましょう」と新規性や独自性を求める設問にしている。前述したトランスの創造性テストの評価観点を基に作成した表1の視点から、表出した創造性の豊かさを見た。

創造性が高く表れた児童は、よどみなくすらすらと描くことができおり、手数も多く、描きたいものが明確で意図がよく伝わる絵であった。一方で、創造性が低く表れた児童は手数が著しく少なく、苦戦した痕跡が窺われた。この様子は幼児の調査結果とほぼ同じであった¹⁸。

b - (1) C <未完成の記号模様 (曲線)>

この調査課題は、未完成の記号模様 (曲線) が描かれた絵を使って誰も思いつかないような面白い絵を描いて完成させることを求めている。調査の結果、スクリブル状に線を重ねたのみの児童が6名いたが、その他は概ね描画できていた。61名中、曲線の直接的な利用はないが周りの描画から軌道線に利用したと推測される描画をした児童は4名いた。曲線周囲に描画はあるが曲線の利用がない、もしくは明確ではない描画の児童が4名であった。様々なモチーフを描き並べたカタログ式表現の児童は7名見られた。

b - (2) D <木の穴から外をのぞくリス>

この調査課題は、雪が解けて春を迎えた頃、木の巣穴から外をのぞいたリスが見た面白い景色を自分なりに描くことを求めている。61名中、カタログ式表現の児童が17名見られた。その他は、人間や動物等の描画の児童が52名と多く、木の穴にいるリスに呼びかけている様子の描画の児童が6名見られた。雲や植物など外の風景を描いた児童は9名おり、抽象やくもの巣状の線画など何を描いているか明確でない児童が5名見られた。

2. 散布図

前回の幼児 (5歳~6歳児) を対象とした調査では描画発達と創造性発揮に強い相関関係は見受けられなかった。今回の児童 (9歳~10歳児) においてはどのような特徴になるのかを探るために、前回の調査と同様の算出方法に基づいて描画発達と創造性発揮について散布図 (図2) を作成し、相関係数を求めたところ、強い相関は見られなかった ($r = 0.499783113$)。全体的な傾向としては、描画発達よりも創造性発揮の方が強く表れた児童が多く、この結果は前回の幼児を対象とした調査と同様の結果であった。

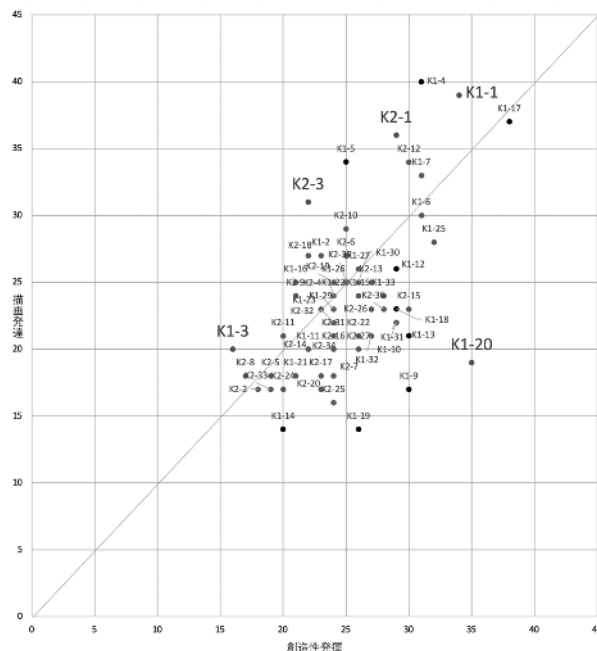


図2 分析対象児の散布図

抽出児5名は太字・大字で表示している。
点群は創造性発揮側に偏りが見られる。

3. 抽出児の分析

描画発達と創造性発揮の散布図において平均値を基準に、気になる位置の児童を抽出し、それぞれがどのような行動特性を持っているかを見ていった。ここでは、描画発達・創造性発揮の両方高い児童、創造性発揮が著しく偏って高い児童、描画発達の評価が偏って高く、創造性発揮は平均を少し下回る児童、描画発達・創造性発揮が平均を下回る児童といった特徴に分けて抽出した。本研究では、絵の特徴や行動特性が似ていた児童をさらに絞り込んで抽出した5名を取り上げ、その描画結果を表2に示して

いる。

(1) K1-1：描画発達・創造性発揮の両方高い児童




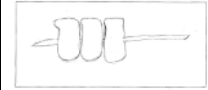














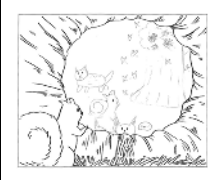

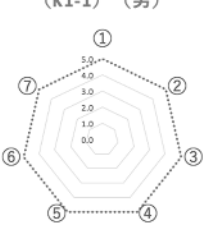

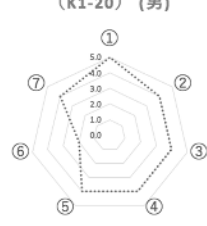
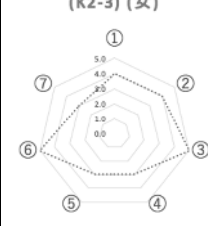
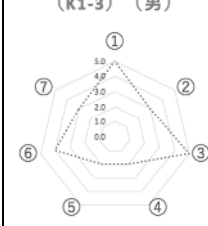
この児童は、抽出児の中で描画発達も創造性発揮も上位であり、散布図の点群の中で高い位置にいる。A〈ソーセージの串刺し写真〉では、ソーセージの円柱形や串が貫通している様子を正確に表現できている。B〈おやつの準備のお手伝い〉では、求められたキーワードを全て描き、表情や衣服などの描写もできている。C〈未完成の記号模様（曲線）〉では、線を頭の形に見立ててユニークな人物を描いている。D〈木の穴から外をのぞくリス〉では、太陽・木・鳥など数種類が描かれている。4つの課題とも奥行や

厚みの捉え方が巧みな絵を描いている。クラス担任は「学習意欲が高く、様々なことに高い関心を持っている活発な児童である」とコメントしている。

(2) K2-1：描画発達・創造性発揮の両方高い児童

この児童は、A〈ソーセージの串刺し写真〉では、ソーセージの円柱形や、串が貫通している様子を表現できている。B〈おやつの準備のお手伝い〉では、求められたキーワードを全て描いており、部屋の様子を細部まで描いている。C〈未完成の記号模様（曲線）〉では、果物の形に見立てて描き、果物を食べている想像上の生物も描いている。D〈木の穴から外をのぞくリス〉では擬人化した太陽や風変わりな木

表2 各抽出児の描画結果とレーダーチャート

抽出児 調査課題	K1-1	K2-1	K1-20	K2-3	K1-3
描画Ⅰ 〈ソーセージの串刺し写真〉					
描画Ⅱ 〈おやつの準備のお手伝い〉					
創造性Ⅰ 〈未完成の記号模様（曲線）〉					
創造性Ⅱ 〈木の穴から外をのぞくリス〉					
レーダーチャート	(K1-1) (男) 	(K2-1) (女) 	(K1-20) (男) 	(K2-3) (女) 	(K1-3) (男) 

※レーダーチャート①～⑦：①好奇心がある、②友達が多い、③外遊びが多い、④よく絵をかく、⑤絵本を読むのが好きである、⑥決まりを守る、⑦砂場遊びや積み木、ものづくり（工作）を好んでする。

などで構成された奥行きのある世界が描かれている。すべての課題で、描き込みに積極性が見られる。クラス担任は「ほかの児童と比べて年長の雰囲気を持っている児童である」とコメントしている。

(3) K1-20：創造性発揮が著しく偏って高い児童

この児童は、K1-1の児童と僅差で創造性発揮の高得点を得ているが、描画発達は平均以下である。B〈おやつ準備のお手伝い〉では、求められたモチーフや場面設定を全て表現できているが、描き方には稚拙さを感じられる。C〈未完成の記号模様（曲線）〉では、線を郷土学習で習った獅子舞の頭の表現に利用している。D〈木の穴から外をのぞくリス〉では、星の形を使った世界を画面いっぱいに描き、擬人化した太陽たちがリスに声をかけている情景を描いている。これら課題の描き方において、独創的な発想を思い切りよく描いている印象を受ける。クラス担任は「日頃から何事にも挑戦はするが、自己主張も強い児童である」とコメントしている。

(4) K2-3：描画発達の評価が偏って高く、創造性発揮は平均を少し下回る児童

この児童は、全ての課題で求められている内容を真面目に捉えて描くことが出来ている。一方で猫や女の子を似た構図で複数回にわたって描いており、イメージが多様化しない傾向が見られる。クラス担任は「日頃から、とても几帳面で真面目な児童である」とコメントしている。

(5) K1-3：描画発達・創造性発揮が平均を下回る児童

この児童は61名中で唯一、A〈ソーセージの串刺し写真〉をレントゲン描法で描いている。B〈おやつ準備のお手伝い〉では、人物とテーブルを描く意思は伝わるが、求められた場面やモチーフは簡易な描かれ方である。C〈木の穴から外をのぞくリス〉でも、コミュニケーションの表現には踏み込んでいない印象の絵である。4課題に共通して余白が目立ち、空間表現への意識は弱いようである。クラス担任は「言動が他の児童と比べ、日頃から幼い印象を感じさせる児童である」とコメントしている。

(6) 抽出児のレーダーチャート

抽出児の特徴をさらに掘り下げて確認するために、

各行動特性をまとめたレーダーチャート（図3）も作成した。一番外側に様に広がっているのは描画発達は創造性発揮も高い評価だったK1-1である。この児童は全ての活動が活発であることが確認できる。

一方、同様に両方とも高い評価であるK2-1は、いくつかの項目が平均またはそれを下回って偏りがあり、K1-1のように広がっていないが、この児童も「よく絵を描く」が高い評価で「好奇心がある」「砂場遊びや積み木ものづくりを好む」が2番目に高い。

また、創造性発揮の方が高い評価だったK1-20は「好奇心がある」が最も高く、「決まりを守る」は最も低い評価ではあるが、それ以外は2番目に高い評価であり、活動的である様子が見て取れる。

これらのことから、描画表現の経験の多さとその他の活動の関心や意欲の高さが評価結果に表れる傾向があるということが共通して見て取れる。併せて、身体的知覚を伴う動的活動が創造性の育成に関与しているのではないかと考えることができる。

そして、K2-3は「決まりを守る」の項目が高い評価であることが見て取れる。この児童は描画発達の評価は高いが、一方で創造性発揮は平均より低いということを踏まえると、課題内容の真面目な描画活動には取り組むことができるものの、イメージの発想や構想における柔軟性、そして、伸びやかに絵を描くといった積極性には欠けている傾向があると考えられる。

抽出児レーダーチャート

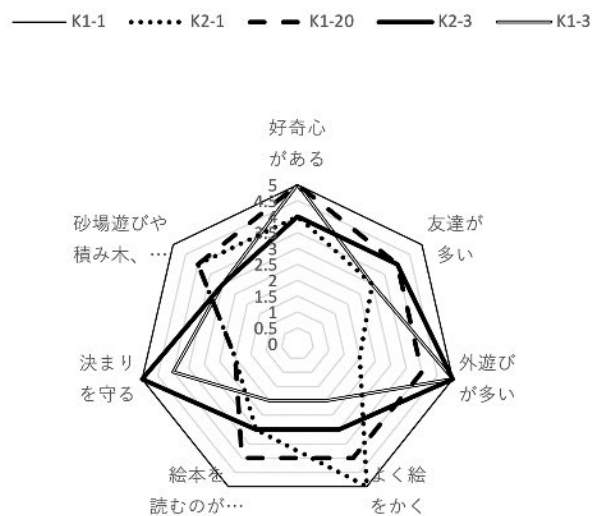


図3

また、描画発達・創造性発揮のいずれも低かった K1-3は、レーダーチャートがほぼ三角形になっており、他の児童と比較すると、行動特性に偏りがあることが見て取れる。

4. 全体的な傾向に関する分析

全体的な傾向も把握するために分析対象児61名について領域分けを行い、それぞれの領域の特徴や特性を比較するために描画発達と創造性発揮の平均で4つの領域に分割し、散布図上に正負判定領域をA～Dで示した(図4)。A領域15名とD領域20名で計35名であり、B領域14名とC領域12名で計26名であった。AとDの領域は正であり、BとCの領域は負であることが図から理解することができる。

また、各領域別の行動特性の平均でレーダーチャート(図5)も作成し、それぞれの特徴を見た。全ての項目において4前後の数値であり、比較的に一様な状態で広がっているのは正の領域のA領域である。対して一番小さな図形であったのは正の領域D領域である。負の領域であるBとCの領域の図形の大きさには極端な差は見られないが、日常の行動に特徴が表れている。レーダーチャートで評価4以上を見て比較すると、描画発達よりも創造性発揮が強く表れたB領域では「好奇心がある」「友達が多い」「外

遊びが多い」傾向にあり、創造性発揮より描画発達の方が強く表れたC領域では、「好奇心がある」「決まりを守る」傾向であることが分かる。

さらに項目別に行動特性の傾向を見ると、描画発達・創造性発揮いずれも低いD領域の児童らは、造形的な活動である「よく絵を描く」や「砂場遊びや積木、ものづくりを好む」の2項目が低い数値である。このことに関して、本研究は描画活動を通じた調査であったため、D領域の児童らにとって苦手意識がある活動の結果として表れた可能性があると考えられる。また、これについてはA領域とC領域の児童らは「よく絵を描く」といった行動特性が、クラス共通でB領域とD領域の児童らより高いことから窺うことができる。

なお、全体的な傾向としてはD領域の児童らは比較のおとなしく活発さに欠ける傾向があることも見て取れたため、今後、この児童らには造形的な活動を含め、「絵本を読む」など、比較的低い行動特性についても関心が育まれるように個別的な支援が必要であると考えられる。また、A領域とD領域の創造性発揮が強く表れている児童は、総合的な関心や意欲が高い傾向にあることを確認できた。

A～D領域の平均値レーダーチャート

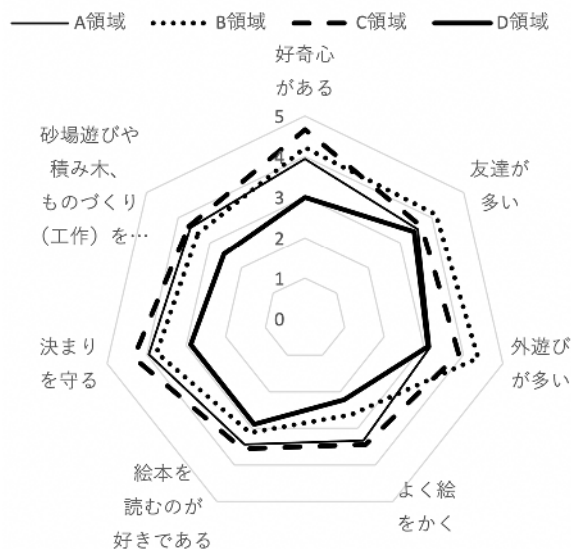


図5

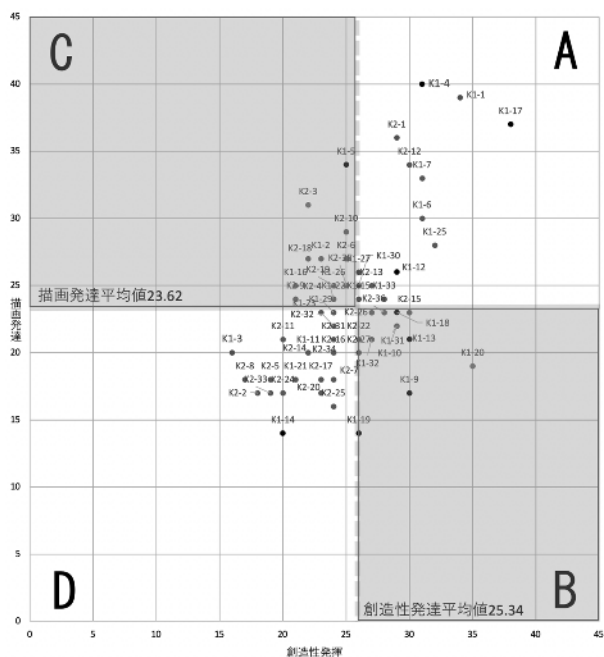


図4 平均で4つの領域に分割した正負判定領域

A・D: 正(+)の領域
B・C: 負(-)の領域

IV. まとめ

児童を対象とした本調査でも、前回の幼児の調査と同様に描画発達と創造性発揮に強い相関は見られなかった。この結果は、知能と創造性の間に相関関係はほとんどないことを示しており、換言すれば、知能の高い子どもが必ずしも創造性が高いとは限らず、低くても高い創造性をもった子どもがいることを示している¹⁹。もちろん、知能と描画発達は同じものではないが、似たような側面があると考えられる。しかし、一方で知能と創造性は知的な課題解決において働く以上、全く別のものではなく、優秀な頭脳の持ち主は両能力をあわせて保有すると考えることができる²⁰。前回の調査において、そのような幼児が見られたが²¹、本調査においてもK1-1の児童はそれに該当すると思われる。

さらに、散布図を概観すると、描画発達よりも創造性発揮に偏りがみられる児童が多いことから、児童でも潜在的に創造性が強く表れる傾向であることが確認できた。そのことから創造性の高さは幼児・児童期特有で見られる可能性がある。

なお、児童では領域と行動観察調査と散布表との関連が複雑になってくることも分かった。このことは、友だちやクラスによる影響を受けやすい年代であることも関係しているのではないかと思われ、思春期を迎える発達段階上の特徴とも考えられる²²。このように児童を対象とした調査では行動特性が見えにくかったり、顕著に表れやすかったりすることを認識したため、児童の中学年以上での調査を行う場合は、観察による調査に加えてアンケート調査も取り入れて検証していく必要があると考える。

上述の課題も踏まえ、今後も描画発達と創造性発揮の関わり合いについて検証するために幼児と児童の調査結果の比較分析を進め、より精緻な分析を行い、これまで蓄積した調査結果のデータを基に、創造性の特性に関する理論生成の可能性について探っていく計画である。

謝 辞

本調査研究に際し、ご協力くださった熊本県K小学校の先生方、4年生の皆様に重ねて心より感謝を申し上げます。

主な参考文献

- ・E.P.トーランス (1966) 才能教育の心理学, 野津良夫監訳, 国土社.
- ・E.P.トーランス (1971) 創造性の教育, 佐藤三郎訳, 誠信書房.
- ・E.P.トーランス (1972) トーランスの創造性と学習, 扇田博元監訳, 明治図書.
- ・E.P.トーランス (1979) 子どもは翔る—創造性の教育を求めて—, 佐藤三郎監訳, 日本ブリタニカ.
- ・E.P.トーランス (1981) 創造性修業学—ゆさぶり起こせ ねむっている創造性—, 佐藤三郎・中島保共訳, 東京心理.
- ・E.P.トーランス D.A.シスク (2000) 才能を拓く その考え方 見つけ方 伸ばし方, 野津良夫監訳, 文芸社.

注

- 1 九州ルーテル学院大学
- 2 認定こども園あかさかルンビニー園
- 3 佐賀大学
- 4 福岡県立大学
- 5 大分県立芸術文化短期大学
- 6 和歌山大学
- 7 福岡女子短期大学
- 8 佐賀大学名誉教授
- 9 神野こども園
- 10 米国の心理学者E. P. トーランス (1915-2003) によって開発されたこの創造性テスト (Torrance Test of Creative Thinking) は、子ども一人ひとりがどのような創造性を持っているのかを知るためのツールとして米国にて活用されている。当創造性テストのもつ大きな特徴は、子どもが潜在的にもっている豊かな創造の可能性を最大限に引きだし、発展させ、調和のとれた個性を育てるための資料を得るための道具であるということである。
- 11 本研究は、創造性テスト図形版を基にしている。(E.P. Torrance & O.E. Ball, *Stream lined scoring guide and norms manual for figural form B, TTCT*. Athens, BA: Georgia Studies of Creative Behavior, University of Georgia, 1978.)
- 12 樋口和美・犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・白石恵里・丁子かおる・前村晃・宮崎祐治 (2020) トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅰ—予備テストから見えてくるもの—, 福岡女子短大紀要第85号, pp.15-24.
- 13 白石恵里・犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・丁子かおる・樋口和美・前村晃・宮崎祐治 (2021) トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅱ—幼児期 (5~6歳児) における調査と分析—, 和歌山大学教育学部紀要第71集, pp.35-43.

- 14 BBCの放送大学の授業ビデオで実施されたリングに串を刺して幼児に描画させ、幼児画の発達の特徴の一つであるレントゲン描法をみる課題と、本共同研究メンバー（前村）が所属していた日仏共同研究（日本学術振興会科学研究費補助金〔課題番号033010339〕の助成を受けた研究）における描画発達調査の課題を基にしている。
- 15 E.P.トーランス（1979）子どもは翔るー創造性の教育を求めてー，佐藤三郎監修，日本ブリタニカ，p.95.
- 16 扇田博元（1986）絵による児童診断ハンドブック，黎明書房，p.50.
- 17 同上，p.70.
- 18 白石ら，前掲書3，pp.35-43.
- 19 ゲッツェルスとジャクソンによる研究において「知能」がやや低くて「創造性」が高い子どもと「知能」が高く「創造性」が低い子どもとの比較では、前者の方が「学業成績」が高いという研究結果の内容を基にしている。（Jacob W. Getzels and Philip W. Jacson, *Creativity and Intelligence*, Willey, 1961.）
- 20 恩田彰編著・住田幸次郎（1971），講座・創造性の教育 第I巻，明治図書出版，pp.82-84.
- 21 白石ら，前掲書3，p.42.
- 22 E.P.トーランス（1981）創造性修業学一ゆさぶり起こせ、ねむっている創造性一，佐藤三郎・中島保共訳，東京心理，p.123.